

《論 文》

現代の窓の向こう側

—カルメン・マルティン・ガイテの文学批評『窓辺から スペイン文学における女性の視点』を足がかりとして—

磯 山 久美子

Más allá de las ventanas en la época contemporánea:
Como la clave de la crítica literaria de Carmen Martín Gaité “*Desde la ventana: Enfoque femenino de la literatura española*”

KUMIKO ISOYAMA

キーワード

スペイン (Spain), 女性作家 (Woman writer), フェミニズム (Feminism), 批評 (Criticism)

確認しておきたい²⁾。

1. はじめに

本稿は、スペインの女性作家カルメン・マルティン・ガイテが1987年に著した文学批評『窓辺から スペイン文学における女性の視点 *Desde la ventana: Enfoque femenino de la literatura española*』¹⁾で指摘した、女性が詩、小説といった創作活動におけるテーマのありようや、ものを書くという行為そのものをめぐる社会との軋轢が、現代のスペインにおいてはどのように変容してきたのか、あるいは依然として変わらない部分があるとすればそれはどこなのかを、ジェンダー史の視点から問い直そうという試みである。

考察に先立ち、作家カルメン・マルティン・ガイテと、本書が書かれた時代背景について言及しておきたい。これはすでに筆者が本書を翻訳した際に述べている事柄でもあるが、改めて

1-1 カルメン・マルティン・ガイテという作家

カルメン・マルティン・ガイテ (1925~2000) は、20世紀を代表するスペインの女性作家の一人である。スペイン中部サラマンカ市の出身で、サラマンカ大学ロマンス言語語文学部を卒業後、マドリード大学博士課程に進んだ。短編『湯治場 *El balneario*』(1955)で作家として頭角を表し、『カーテンの隙間 *Entre visillos*』(1958)でエウヘニオ・ナダル賞を受賞、小説家としての地位を築いていった。マルティン・ガイテ自身の姿が投影されているとされる『後ろの部屋 *El cuarto de atrás*』(1978)では女性作家が登場するが、この作品で女性作家として初めてスペイン文学賞を受賞した。さらに一連

1) Martín Gaité, Carmen, *Desde la Ventana : Enfoque femenino de la literatura española*, Madrid, Espasa Calpe, 1987.

2) 筆者は2018年から2022年まで『流通経済大学論集』2018年3月, vol.52, 2019年3月, vol.53, 2020年3月, vol.54, 2021年3月, vol.55, 2022年3月, vol.56において本書の翻訳を一章ずつ手がけてきた。日本語での内容を理解するものとして参照されたい。

の著作を通して1994年にも同賞を受賞した。以後、『晴れたり曇ったり *Nubosidad variable*』(1992), 『雪の女王 *La reina de de las nieves*』(1994), 『奇妙なことは生きること *Lo raro es vivir*』(1997), 『家を出る *irse de casa*』(1998), 未完の『血縁者たち *Los parentescos*』(2001) などの長編小説を発表した。さらにエッセイや映画、テレビの脚本も手がけ、『ボヴァリー夫人』, 『嵐が丘』, 『ジェイン・エア』などをはじめとした翻訳も数多くある。

しかしマルティン・ガイテが作家として際立っているのは、小説家としての活動だけでなく、歴史や社会研究へも深い関心を寄せていたことである。『マカナス、異端審問のもうひとりの犠牲者 *El proceso de Macanaz: Historia de un empapelamiento*』(1975) では18世紀の政治家でもあり作家でもあったメルチョール・マカナスが、教会改革を目指すもあえなく挫折する軌跡を考察した。また『18世紀スペインにおける恋愛様式 *Usos amorosos del siglo XVIII en España*』(1972) では、恋愛に対する18世紀の人の意識や様式を言語、風俗といった視点から研究し、女性たちが自らの意志で恋愛を選び取っていたことを明らかにしている。さらにこの関心は、『内戦後のスペインにおける恋愛様式 *Usos amorosos de posguerra española*』(1987) へと続いた。このように多作な作家でもあったが、2000年、病のために亡くなった。

1-2 フェミニズム批評との関わり

マルティン・ガイテの『窓辺から スペイン文学における女性の視点』³⁾のテーマである、女性が創作活動をする際のありようを問題とするという文学批評は、その時代背景において、アメリカを中心としたフェミニズム運動や文学におけるフェミニズム批評の隆盛とも無関係ではない。作家であり芸術家でもあったケイト・

ミレットは『性の政治学』⁴⁾(1970) で、フェミニズムの視点から文学テキストが普遍性、中立性を打ち破るものであることを明らかにした。その後女性作家のテキストの読み直しが行われていく。例えばエレイン・ショーウォーターは、女性の自己意識がイギリス小説のなかでどのように語られてきたかを『女性自身の文学』⁵⁾(1977) のなかで検証し、女性は自身の文学を育ててきたことを明らかにした。

マルティン・ガイテは本書の序章で、フェミニズム批評についての自身の考えを明らかにしている。それによれば、当初は女性がものを書くときに独特の叙述法をもっているのかについては全く気にしたことがなかったと述べている。が、1980年に講義のために訪れたニューヨークでヴァージニア・ウルフの『自分ひとりの部屋』⁶⁾を読んだ際、女性の言説に特殊性があ

4) 全米女性解放運動の初期に最も影響を与えた評論家の一人。1960年代に公民権運動に関わったなかから仲間と共に全米女性機構(NOW)を設立する。リサ・タトル『フェミニズム辞典』, 明石書店, 1991年, p. 142。井上輝子ほか編『岩波 女性学事典』, 岩波書店, 2002年, p. 117によれば、『性の政治学』では、伝統的な政治概念が、公的領域における狭義の政治的領域しか含意していないことを批判し、政治概念の拡張を主張したと説明している。また男性支配の重要な手段の一つが、宗教、学問、思想などの文化的構造であるとも主張し、これらの文化を“男性支配”という観点から批判的に考察する学問が必要であると提唱した。

5) ショーウォーターは、自身の論文のなかでガイノクリティックという造語を用い、女性作家に焦点を当てて女性によって書かれた文学の歴史、真理、構造、言語、意味を中心に研究することを論じた。

6) ヴァージニア・ウルフ(1882-1941)。ロンドン生まれ。モダニズムの作家、批評家として知られる。『自分ひとりの部屋』は1929年に発表されたエッセイである。エッセイの底流をなすのは女性と小説というテーマの文学論だが、「女性が小説を書こうと思うなら、お金と自分ひとりの部屋をもたなければならない」という言説が広く知られているように女性論、フェミニズム論でもある。またフェミニズム批評の古典ともいえる。邦訳もいくつか存在し、タイトルも異なっている。村松加代子訳『私ひとりの部屋』, 松香堂書店, 1984年,

3) 以下、『窓辺から』と本文中では表記する。

るかもしれないという問いにこだわってみようとさせた」と述懐している。そしてショーウォーターやジュディス・フェッター、アドリエヌ・リッチといったフェミニズム批評の言説を紹介しながら、慎重に自身の見解を探ろうとした。自身は女性であることやこれまで得た知識で、自分の信用が失われたと思ったことはなかったが、過去の時代には、女性の作家が自己の創作と家父長制というジェンダー構造の間でどのように困難と立ち向かったかを理解していると述べている。そこで時代区分としては、16世紀、スペイン語の表現力の豊穡に貢献し、スペイン神秘文学を代表する作家として知られた銑足カルメル会を創立した修道女テレサ・デ・ヘスースの叙述から、20世紀のスペイン内戦(1936-39)直後に彗星のように登場して『何もない *Nada*』(1944)で、創設されたばかりのエウヘニオ・ナダル賞を女性として初めて受賞したカルメン・ラフォレの作品までを取り上げながら、女性の記述のありようについて、またその作家が生きた時代には、何が女性を制約していたのかについて述べているのが本書である。

タイトルに『窓辺から』と記しているのは重要な点であり、本書の本質を成すといえる。作家によれば「理論的よりも詩的な直感」によるもので、「内部空間に閉じ込められた女性にとって、内部空間はファンタジーを作り上げる上での導火線となりうるのか」という視点からだった。その際、窓は基本的な要素としてほとんどシンボルとして現れたと述べている。窓は外界と内部とを隔てているが、それは単に物理的な意味だけではない。家父長的なジェンダー構造のなかで文字通りドメスティックな空間にとどまるように長い間教育されてきた女性たちにとって、窓は外と内を隔てる倫理的、道徳的

な障壁でもあった。つまり内において外を眺めることしかできない、外界への憧れの扉が窓だったのである。その際、女性が内から外へと向かう推進力を得るために用いたのが創作という方法であり、その想像力をどのようにはたらかせて外へ飛び出そうとしたのかを分析している。分析の手法として、男性の評論家にありがちな「ことさらに難しい理屈を列挙したようなディスコース」をマルティン・ガイテは嫌っているために、できるだけわかりやすく叙述したいと試みている。そのため注釈もない。とはいえ本書は、当時のスペインにおけるフェミニズム批評の初期の試みと言える。この点において、モニカ・フエンテス・デル・リオは、一連の作品におけるマルティン・ガイテのジェンダー視点を指摘している。

1-3 本稿の構成

本稿ではマルティン・ガイテが示した「窓」の機能を理解し、手がかりとしながら現在に至るまでのスペインにおけるジェンダー構造の変化のありようを考察する。そして現代の女性作家の作品を通して、女性たちが窓から越えたもの、あるいは今もお障壁としてとどまっている現状を考察していく。現代作家の作品の中心として取り上げるのは、ドロレス・レドンドのミステリー小説『バサジャウンの影 *El guardian invisible*』⁷⁾(2013)である。この作品を選んだ理由は、ミステリー・エンターテインメントの手法をとりながら、ある連続殺人事件に向かうナバーラ州警察殺人課捜査官アマリア・サラサルという頭脳明晰で行動力もあるヒロインが、一方では現在のスペインの女性が抱えている主要な問題、仕事、結婚、母性のありようなどを全て内在化しており、事件の展開と並行してアマリアが抱えるジェンダーと家族をめぐる問題が次第に顕在化してくるからであ

川本静子訳『自分だけの部屋』、みすず書房、1989年、片山亜紀訳『自分ひとりの部屋』、平凡社ライブラリー、2015年。以下、本稿に登場するマルティン・ガイテの記述は、これまで『流通経済大学論集』に掲載した本書の拙訳を参照している。

7) Redondo, Dolores, *El guardian invisible*, Barcelona, Planeta, 2013. 邦訳は『バサジャウンの影』白川貴子訳、早川書房、2016年。

る。また殺人事件そのものが現在のスペインの若い女性のありようを描き出している点においても注目に値する。その点においてこの作品は単なるミステリー・エンターテインメントではなく、社会小説の意味合いも帯びていると指摘することが可能であろう。また本稿においてはテーマに添って他の女性作家の作品も引用しながら論を進めていく。

2 スペインの女性をめぐるジェンダーの問題

この章では、マルティン・ガイテが『窓辺から』で指摘した、女性が文学に携わる際の諸問題について当時の女性の状況を補足しつつ述べていく。

2-1 識字と女子教育

マルティン・ガイテは、第1章「窓ごしに眺めながら」でマヌエル・セラーノ・サンスの書を引用しながら、扱われている1404年から1833年までの女性作家の共通性として、ほとんどが独学だったことを指摘した。例えば19世半ばから20世紀前半に活躍したエミリア・パルド・バサンは伯爵家に生まれたが高等教育を受けることはできなかった。曾祖母はブドウの汁のインクで印刷された本の文字を書き写し、自身は幼少の頃に文字を覚えてくれたのは母親だったと引用している。さらにマルティン・ガイテは、そのようにして苦労して個人的に文字を獲得していった女性たちが創作というジャンルに挑もうとするとき、立ちはだかったのは外部からの批判はもとより、自身の内側からも「取るに足らない存在」として自己を内面化していたことを指摘する。それは女性の生き方において強固なジェンダー規範が存在していたからだった。

当時の女性像の支配的モデルは、16世紀の詩人であり聖職者であったルイス・デ・レオンが著した『完璧な妻 *La perfecta casada*』にあったとされる。夫に仕え、子どもを育てるのが女性の領分とされていた。ルイス・デ・レオンに

ついて『窓から』では、このように彼の言葉を引用している。

男性は公的なことのために存在するのであり、女性は囲われている存在である。であるから男性は語り、光のもとへと出る。そして女性は閉じこもり、隠される存在である。

実際、政府による初等教育の義務化計画が始まるのは1838年である。それまで女子を受け入れる教育機関は、18世紀、女子修道院が開設した学校においても初等教育にとどまっていた。1860年の統計では男性の非識字率が64.9%であるのに対し、女性が85.9%と高かったことから裏付けられる。女性に教育は必要ないとされていた時代が長く続いていた。1857年に教育基本法が施行され、6～9歳までの男女初等教育の義務化が始まるが、設備や教員不足、教育に対する国民の理解の低さもあり停滞していた。識字率の向上を含め、女性に自由な高等教育へのアクセスが可能になるのは1910年になってからである。19世紀半ば、作家であり刑法学者でもあったコンセプション・アレナル（1820～1893）は女子教育の必要性を訴え続けた。自身、1842年から45年まで大学で学ぶ機会を得たが立場は聴講生でしかも男装で参加したことが知られている。とはいえ裕福な家庭の子女のなかには、少数ながら高等教育機関で学んだ女性は存在した。初めて医学の博士号を取得したマルティナ・カステルスをはじめとして大学などの高等教育で学んだ女性は、44人という指摘がある。

この章でマルティン・ガイテは、「窓」の果たす役割について言及している。前述したように従来のジェンダー規範によって家の内側にいることを余儀なくされていた女性がさまざまな理由で窓辺にたたずむとき、「窓辺の女 *La ventanera*」と評された女性表象について、それがいかに批判的な言説として機能していたかを指摘している。軽薄で虚栄心が強く、男性を

惑わそうと窓からのぞき見をする欲望に満ちているのが「窓辺の女」だった。しかしこの窓に関する記述について男性と女性では異なった視点があり、女性はそのような視点をもたないと述べる。閉じ込められていると感じる女性からみれば窓は、休息に導くものであり、うごめく外の世界を夢見るために内側からふれる場所であり、新たな姿を求めて女性の視線を飛ばすことのできる唯一の突破口だと述べ、19世紀の詩人口サリア・デ・カストロの詩を紹介し、窓は開かれた未来への扉としての機能を果たすと述べる。

目の前に道が広がっている。
その道はどこへ行くかわからないが
だからこそ私は
その道を行きたい。

そもそも男性は、将来、家族を養うべく勉強しいかに「立派な」職業に就くかが生き方として問われていた。外に出ることが義務化されていた男性にとっては窓など物理的な意味しかなかったのである。

2-2 言葉の開拓とジェンダー視点

このように女子教育が体系化されていなかったことは、同時に女性の知的能力が劣っているという言説を広めることにも繋がった。女性が知的な思索をしたり、言葉を開拓する能力を否定した言説が、「博識」とされた男性たちから19世紀においては広まっていたことを作者は示す。それゆえものを書くことは女性にとって非常に挑戦的な行為であると同時に、その方法も模索しなければならなかった。そして方法として女性作家が選択したのが、自身の想いを率直に語る詩や日記、あるいは架空の相手に向けて自身の想いを語る書簡という形式だった。それは表現力の突破口として選択されたマルティン・ガイテは第2章で述べる。実際、後に小説や評論、戯曲を書くようになるエミリア・パルド・バサンをはじめ、詩作から出発する女性作

家は多い。16世紀に活躍し、詩や神秘主義についての文章も多い修道女サンタ・テレサ・デ・ヘスースの文章表現は、難解とも評されるが、卓越した比喩の方法などスペイン語の表現力を一気に豊かなものにしたと今日では評価されている。しかしそれはあらかじめ理論や計画があったわけではなく、自身が抱えるさまざまな内的葛藤を表現するために書き方を熱心に探していった結果、辿りついた世界であると作者は述べる。聖テレサ自身、単なる理解は物ごとを表現する際に役に立たないとも述べている。女子教育の不在は皮肉なことに、創造世界において新しい言葉を開拓することで、女性の記述にオリジナリティをもたらすことになったのである。

第3章ではロマン主義が導入されてきた際の男性作家と女性作家が描く女性像の違いに言及した。神秘性や困難さと見た目との相関性に力点をおくとき、愛の情熱の形式がスペインに輸入されてきたと述べ、その際、女性は愛情表現を放つことを見つけたと指摘する。愛の対象はそれまでの宗教的な忘我を示す神から、人間へと変化した。とはいえスペイン的なものとしてマルティン・ガイテが述べるのは、宗教との関わりである。1930年代に議員でもあったフェミニスト、マルガリータ・ネルケンの評論『スペインの女性作家たち』から、「この国では宗教的な背景は推進あるいは抑制することの障害として成り立っており、女性の知的な能力をめぐる軸である」という一文を引用した。強固なカトリックの国でもあるスペインにとって宗教が指し示すモラルは、従来のジェンダー規範の土台を形成している。

宗教的モラルから逸脱できず、従来のジェンダー規範の視点においてしか創作できなかった女性作家の例として、男性名のペンネーム、フェルナン・カバリエーロとして執筆した本名セシリア・ベール・デ・ファーベルの作品『かもめ *La Gaviota*』を取り上げている。女性の善として貞淑な公爵夫人レオノールを、悪としてロマン主義的で野心的な芸術家マリサラダ

を闘牛士ペペ・ベラへととの関係の上で対比させるが、マリサラダを徹底的に魅力のない人物として造形したと批判した。

また、ロマン主義的な創作をするエスプロンセーダやベッケルのような男性詩人が描く女性像は、肉体を伴わない神秘的なミューズとして、自身のナルシズムも伴いながら描かれると述べる。男性作家にとってのミューズは、空虚な青ざめた女性として表象されるが、このようなロマン主義的な創作が多くを占めたなかで唯一の反証として挙げるのが女性作家ロサリア・デ・カストロだと指摘する。小説『青い長靴を履いた紳士 *El caballero de las botas azules*』に登場するミューズは、プロローグで尊大で知的な主人公グロリア公爵に対し、彼を観察し洞察力をもった予言者として彼の思考を内省的進ませるよう導いていく。マルティン・ガイテは、こうした女性像を「男性的なミューズ」と表現する。つまり理知的な女性像の造型である。物語にはグロリア公爵と関わりをもつ数人の女性たちが登場するが、彼女たちもまた自分の意思を表明する人物として描かれており、ロマン主義の時代に生きていたロサリア・デ・カストロが新たな女性像を構築しようとしたことが窺える。

2-3 内戦後の小説における新しい女性像

第二共和国側とフランコ将軍を首謀者とする反乱軍との戦いだったスペイン内戦(1936～39)は、親族同士による骨肉の争いをも引き起こし、国を二分する戦いだった。反乱軍側の勝利に終わった後は国土の荒廃と同時に多くの人々の精神をも分断した。独裁者フランコによる敗者への厳しい弾圧、国内に留まった共和国側の兵士は収容所に送られた。密告制度の奨励、反体制派の逮捕、拷問、投獄、暗殺といった暗黒の時代となった。またスペインは枢軸国であるドイツのヒトラー、イタリアのムッソリーニとの結びつきを批判されて国際連合からも排斥され、国際社会から孤立した。その結果、経済の復興は厳しくアウトアルキア体制

(自給自足的経済体制)を取らざるを得なくなったが、配給制度だけではとうてい足りず闇市が横行し、初期は餓死者も出たほどの困窮ぶりだった。「奇蹟の復興」と呼ばれる経済復興を遂げていくのは1950年代末である。

そのような社会状況で1944年に創設されたばかりの文学賞アウヘニオ・ナダル賞を獲得したのが全く無名の23歳の女性作家カルメン・ラフォレの『何もない *Nada*』だった。第4章でマルティン・ガイテは、この受賞をスペイン文学における相対的に新しい時代の始まりと位置づけている。すなわち女性作家が競争の場に参入することになっていった結果、今日のスペインの文学状況が形成されてきたと述べる。物語のヒロイン、アンドレアはそれまでの「女性の理解者である男性によって庇護され、結婚によって物語が終わる」といった典型的なロマンス小説を破壊するヒロインとして造型されている。何が物語として革新的かといえば、これまでの英雄的なステレオタイプの男性が登場しないことであり、ヒロインは大学の仲間と交友はするが恋愛には至らない。大学に行くために地方からスーツケースひとつで大都会のバルセロナへ出てきて、見知らぬ親戚とアリバウ通りの家で1年間生活を共にする。食べるものにも事欠く貧困、家族同士の諍い、アンドレアに対して伯母の旧来のジェンダー観に基づいたいやがらせ、日常的な家族間の喧嘩、そして孤独のなかで過ごし、最後にその生活を捨てて出て行く。しかし彼女が得たものは「何もない」のが物語の最後の場面となる。

ゆっくりと階段を下りた。胸が高鳴るのを感じた。

階段を初めて上ったときの恐ろしいほどの期待と、人生の熱望を思い出した。

漠然と期待していたこと、完全な人生、喜び、深い関心、愛といったことについて何も知らないまま立ち去る。アリバウ通りの家からは私は何も得なかった。少なくとも、そのとき私はそう思っていたのだった。

マルティン・ガイテは、この小説のヒロイン像としての新しさは、こうした物語構成だけでなく、ヒロインを中心として物語が発展していくというよりも、ヒロインは周囲で起きていることを観察し、語る役割に位置づけられている点にあると指摘する。いわば証言者としてのヒロインの誕生ということである。服装や身体的概観などは特に描写されず、さまざまなことに気落ちはするが、声高に抵抗することもなく無関心で無気力な面も見せる。つまり「奇妙な娘」の造型であり、こうした女性のパラダイムは、社会が遵守することを命ずる愛情と家庭的なふるまいにおける「普通であることの問題」について、カルメン・ラフォレ以降、マルティン・ガイテ自身の小説も含めてアナ・マリア・マトゥーテ、ドロレス・メディオなど女性作家の作品のなかで繰り返されてきたと指摘する。それを「奇妙な若い女性」の系譜と呼び、それ以前の小説で描かれる女性のふるまいとは断絶していると述べる。そして今後、女性によって描かれる小説の新しい主人公は、あえて挑戦し、周辺に留まり、そこから考えるようになるだろうと指摘する。いわば女性作家が描く物語上でのアンドレアの「姉妹」たちの共通した特徴は、通りへ飛び出すことを阻む家族の壁という束縛から脱することであり、彼女たちの視点で物事を見ていく人物像なのだと述べる。

スペインのどんな時代においても1940年代から60年代にかけての30年間で、女性が署名した多くの小説が出版されたことはなかったとマルティン・ガイテは述べる。その現象は売れ筋の小説として読者に受け入れられ、多くの文学賞も獲得した。ただし、そこに登場する物語は、「お決まりのキス」で終わるようなロマンス小説の系譜につながるものはひとつもなかったともつけ加えている。

窓との関連でいえば、この時代において女性作家は窓から憧れとして外を見ることはもはやなく、自ら外界へ飛び出す行為主体へ変化したことが理解できる。独裁政権下ではセクシオン・フェメニーナ（女性部）が旧来のジェン

ダー規範に基づいて、「女性の本分は結婚して良き妻、良き母になることである」と女性のふるまいを厳しく指導していたにも関わらず、女性作家によって紡がれた物語世界では、密かに抵抗した新しいヒロインが創作されていたと言えるだろう。

3 民主化時代と女性像の変容

この章では、現代において現実の女性像がどのように変容してきたかを短く概観しておく。

3-1 女性の高等教育

フランコ政権末期の70年代になると経済の自由化を契機に、教育の大衆化がはかられ、女性の高等教育が推進する。大学進学者は1935年には女性は8.8%に過ぎなかったが1970年には26.6%を占めるようになった。ただし高等教育を受けたとしても就職は専門分野に就けるわけではなく、あくまでも男性の補助要員であり、女性は「月経期は疲れて仕事に打ち込めない」という通説と、結婚して子どもを産むのが女性の本分というジェンダー規範に阻まれていたのでそれほど進まなかった。

1975年にフランコ将軍が亡くなり、3年間をかけて民主化体制へと移行していく。現代において女性は男性を上回って高学歴化が進んでいる。1980年代は男性がやや上回っていたが91年、女性の大学進学率が男性を上回り、その傾向は現在でも続いている⁸⁾。専攻分野においても人文系が80%を占めていた80年代から、社会科学、複合領域と多様化するようになった。特に医学部において女性の進学率はめざましく、医学部で学ぶ女性は約7割を占めることから、「医学の女性化」を憂慮する保守派からの声が高まるほどの状況になっている。

8) *Mujeres y hombres en España*.2010, Instituto Nacional de Estadística, Madrid, 2010, p. 25.

3-2 女性の労働

第二共和国（1931～36）で女性の労働が可視化されていった時代から、内戦を経て「女性は家庭へ帰れ」という独裁政権下で後退した女性の労働は、経済発展に伴って安価な労働力が必要とされたことから、法改正を行い女性の労働を可能にした。その結果、1950年に15.8%だった労働力率は、1975年に28.7%まで上昇し、結婚後も職が保障されるようになった。ただし内容としては教職を除き、多くが補助的、非熟練労働に留まっていた。

民主化後、女性の労働力率は上昇を続けており現在では50%を超えている。2019年、コロナウイルスの流行により一時、建築分野やサービス業などの落ち込みにより男性よりも女性の労働力率が上向きになったが、その後、経済全体が悪化したことで、医療分野を除いては相対的に停滞した。

スペインにおいて女性の労働をめぐる問題点のひとつは、賃金格差にある。2017年段階で男性を100とした場合、女性は22%減となっている⁹⁾。特に女性が多いサービス業などでの賃金格差が大きい問題となっている。また、不安定雇用の原因として正規雇用が見つからないためにやむを得ず非正規のパートタイムで働く率も女性のほうが高いことが問題となっている。2019年のパートタイム比率をEUと比較すると、EU28カ国は23%となっているのに対し、スペインは52.4%と高い¹⁰⁾。

3-3 ワークライフバランス

ワークライフバランスの問題においても、料理あるいは家事（男性11%、女性20%、子どもの世話あるいは教育（男性21%、女性38%）においても女性の活動割合が男性よりも高く、家族に病人や障がいのある人の世話においても女性の割合が高い（男性14%、女性20%）¹¹⁾。こ

れは家族のケアは女性が担うものだという従来のジェンダー観にもとづいた社会通念が踏襲されている面があることを示している。さらにワークライフバランスの問題として、公立の保育所が少ないことも問題となっており、保育費用の高い私立に入れるのを断念して子育てのためにパートタイムを選ぶというケースも報告されている。

さらに近年の女性をめぐる大きな変化として挙げられるのは、女性が子どもを産まなくなったことである。2018年、合計特殊出生率は平均1.25人だった。その一方、死亡者数や高齢者数は増加しているため、スペインは明らかな少子高齢化社会になっている。2019年の合計特殊出生率は1.21人とさらに低くなっている。

また、これまでに考えられないような数値として上がっているのが婚外子率である。2003年は23.4% だったのが2007年に30.2%、2019年、46.8%にまで達している。3人に1人がシングルマザーの割合だった時代は大きな社会変化ととらえられたが、現在ではすでに半数近くがシングルマザーから生まれている。カトリックの伝統から言えば出産は、正式な婚姻手続きを交わしたカップルの間でのされるものとみなされていた。1991年の婚外子率が10.01% だったことを振り返れば、この30年で飛躍的な伸びを見せていることがわかる。

このような女性の変化をもたらす要因としてはいくつか考えられるが、ひとつには高等教育へのアクセスが女性の職業獲得へとつながっている点が挙げられる。だが女性の方が男性に比べて失業率が高いため、一度仕事に就くとなかなかやめにくいという要因もある。さらに保育所など子どものケアをする施策が十分でないことも子どもを産むことをためらう要因ともなっている。

3-4 女性の政治参加

他方、女性が政治という意思決定の場に参加する割合は他国と比べても充実した数値を示している。2019年、世界経済フォーラムは経済、

9) 労働者総同盟 (UGT) の調査による。

10) Instituto Nacional de Estadística, 2016年

11) Instituto Nacional de Estadística, 2016年。

教育、健康、政治の4分野14項目を調査し、男女平等を指数で表す各国のジェンダーギャップ指数を報告した。それによると日本は過去最低の121位だったが、スペインは29位から8位に躍進した。これは政治分野での女性参加が伸びたことにあり、女性議員、閣僚ともに比率が高くなったからであるとされた。2023年1月現在、社会労働党サンチェス政権での女性閣僚13人は男性閣僚を上回っており、下院での女性議員の比率は46%となっている。さらに自治州議会においては女性議員が50%を超えている自治州もある。2007年に施行された男女平等法において、女性候補者を一定数割り当てるクオータ法の実施を締結したことも後押しとなっている。

これまで見てきたように、1975年の民主化以降、女性像は大きく変容している。女性は高等教育を受け、仕事に就くようになった。しかし賃金格差は依然として存在する。結婚や出産は形態が変容してきている。教会婚よりも役所に婚姻届を提出すればよい市民婚の割合が増えており、そもそも事実婚の形態であることも多い。そして結婚したとしても子どもは産まなくなっている。あるいは産んだとしても事実婚やシングルマザーであることも多い。このようにリプロダクティブ・ヘルス/ライツ（性と生殖の権利）は女性が自らの意思で選択するという状況になっていることが理解できる。さらに2005年には同性婚も認められて婚姻数の約1割は同性同士のカップルが誕生している。一見すればスペイン社会は、もはや従来のジェンダー規範など存在しないように思えるほど変化していることが理解できるのである。

4 現代の女性作家が描く女性像とは

このような状況のなかで、現代の女性作家はどのような創作をしようとするのだろうか。

この問題に先立ち、現代では女性作家がどのような位置を占めているのか確認しておきたい。作家でもあり評論家でもあるラウラ・フレ

シヤスは、1999年で最も売れた本は女性の署名によるものだった、という「*Qué Leer*」という雑誌の内容を紹介しつつ、結論として女性作家はまだマイノリティであると述べている。例えばスペイン語で書かれた小説は主要な出版社から刊行された作品129冊のなかで男性は98冊、女性は31冊（24%）であり、詩作は32冊のなかで女性は7冊（22%）、エッセイは73冊のうち女性は11冊（15%）であると指摘した¹²⁾。2022年の現在、女性は男性に比べて読書をするが、2021年、37.8%だけが女性作家の作品の刊行であるという指摘がある¹³⁾。また『エル・パイイス』紙は、「出版社は男性作家の作品を多く出版するが、よく売れるのは女性作家の作品」であることを指摘している¹⁴⁾。つまりここには出版業界におけるジェンダーの問題が生じているといえるだろう。

本稿でとりあげるドロレス・レドンド『バサジャウンの影 *El guardian invisible*』（2013年）は、「バスタン溪谷三部作」と称される第一作目で、スペインでは32刷を重ね、百万部近くが売れているとされる。また世界の34カ国で翻訳されている。続く第2作、『*Legado en los huesos*』（2013年）、第3作、『*Ofrenda a la tormenta*』（2014年）を刊行し、2016年にプラネタ賞を受賞した。作品は2017年に映画化され、監督をスウェーデンのベストセラー小説『ミレニウム』の映画作品を手がけたフェルナンド・ゴンサレス・モリーナが務めた。

レドンドは、この小説以前は作家としては無名で、このシリーズが爆発的にヒットをしたことにより、自身の最初の作品『*Los privilegios del ángel*』が刊行の運びとなったというエピソードがある。作者は1969年、北部スペインのバスク地方、ギプスコア県、サン・セバスティアン生まれで、デウスト大学で法学を学んだが

12) Freixas, Laura, *Literatura y mujeres*, Barcelona, Destino, 2000, pp. 33-36.

13) EFE, 20 de Agosto del 2022.

14) *El País*, 4 de noviembre de 2021.

その後は食科学を学んでいる。

4-1 キャリア刑事アマイア・サラサル

まず小説のプロットを紹介しておこう。小説の主人公アマイアは、ナバラ州殺人捜査課の捜査官であり、アメリカでプロファイリングの専門の訓練を受けたキャリアの捜査官である。通常は夫のアメリカ人で芸術家のジェームズとパンブローナに住んでいる。男性社会の警察機構のなかでごく稀な女性のキャリア刑事という設定は、ハードボイルドと称されるミステリージャンルでは珍しいといえるだろう。当然ながら「女性の上司」は同僚や部下の男性たちの間に軋轢をもたらし、随所に男性の反感と嫉妬が描写され、特に同僚のフェルミン・モンテスは事件解決の足かせとして機能する。さらに事件解決のために治安警察とも連携をとる必要が出てくるが、アマイアは居丈高に相手のミスを突くのではなく、相手のプライドを傷つけないような配慮を行いながら進める方法をとる。その結果、最初は女性ということで反感を持っていた警部補も、後から協力するという態度に変化する。こうした点からも物語全体を通して作者がジェンダーを意図した構成が窺える。仕事上のアマイアは明晰で有能で、勇敢な捜査官である。コーヒーばかり飲んであまり食事をすることに関心をもたない。

少女が猟奇的な形で殺されるという事件が起きたために、アマイアは、パンブローナから車で1時間ほどの現場へ向かうが、現場のある街エリソンドは彼女の故郷だった。そこから日常的にアマイアを苦しめ、逃避するために長い間訪れなかった故郷と家族の物語が明らかになっていく。描き出されるのはアマイアの内面であり、母性をめぐる葛藤である。

4-2 母性をめぐる問題

母性をめぐる問題は過去と現在の連関のなかで提示される。ひとつは過去に母親から虐待を受けていたことだった。3姉妹のなかで末のアマイアは、日常的に理不尽な対応をされていた

が、暴力をふるわれることはなかった。がある日、ふとしたことをきっかけに母親に菓子を作る道具で殺されかける。アマイアの実家は地元では有名な大規模な菓子店である。物語ではなぜアマイアだけが母親から敵視されるのかは、母親の精神の病という理由しか提示されないが、文字通り九死に一生を得た少女は、週末を除いて伯母の家で過ごし、長じて勉学のために故郷を離れて戻らない。むしろ家を出るために猛勉強した結果、現在の仕事に就いている。母親はすでに亡くなっているが実家は苦しい思い出の場所として記憶されている。そして母親の記憶のせいで悪夢にうなされることが多い。夫には幼少期のできごとを話していない。

もうひとつの母性をめぐるアマイアの現在の問題は、いっこうに妊娠の兆候が見えないことである。夫ジェームズの母親は折に触れ「無邪気に」妊娠について問い合わせをし、それがアマイアを苦しめる。一時期不妊治療などもしていたこともあるが、幼少期に母親から受けた深い傷が無意識に拒否反応を起こしていることは容易に想像できる。キャリアの捜査官として有能に仕事をこなしているが、既婚の女性であることから直面する、いわゆる仕事と母親になることを選択という問題も、また物語で提示されている。

4-3 主体的なセクシュアリティの獲得

現代の小説で決定的に過去の女性作家の作品と異なっていると思われる点は、セックスの描写が明快とも言える形で描かれることである。そこではセックスは日常的な愛の交歓の一つとして、お互いが能動的になって行うという意味合いで描写される。

女性の主体的なセクシュアリティを初めて描いた作品として、1889年にエミリア・パルド・バサンが著した『日射病 *Insolación*』がある。寡婦となった20代後半の公爵夫人アシスはある日、年下の有閑貴族パチェコに出会い惹かれていく。アシスは原因不明の頭痛に悩まされるが、それは未亡人としての社会的モラルと、自

身の欲望との間に引き起こされた葛藤によるものだった。物語はアシスの性的欲求が次第に呼び覚まされていく様子が描かれるが、進展はしない。最後に業を煮やしたパチェコが故郷に戻ろうとする際に、アシスが思わず引き留める。それに対しパチェコは、「よく考えろ。もしも僕が残るということは、一晚中去らないということだ。(中略)君が決めるんだ」と決意を促す。そのとき初めてアシスは自己のセクシュアリティを自覚し、「いてちょうだい」と答える。これは自身のセクシュアリティを「発見」した女性の物語なのである。

作品は発表されると同時に、読者と同世代作家の間に賛否両論を巻き起こした。作家ホセ・マリア・ペレーダは、「道の踏み外し方を微に入り細に入り、へきえきするまで」小説のなかで展開したと厳しく批判した。

なぜならキリスト教世界では、性の目的は種の再生にあるのであり、「正しい」セックスは結婚している男女の間で行われるべきものであり、快楽を追求する者は断罪されるべきだとされていたからである。さらに非難の背景にはセクシュアリティの二重基準がある。男性は多数の女性に対して欲望しても容認されるが、女性は夫となる一人の男性に対してだけ身体を預けるのであり、しかもその態度は受動的で静的なものでなければならなかった。パルド・バサンは、こうした19世紀スペインの社会に、女性のセクシュアリティのありようというテーマで挑戦したのである。

今では作家としての地位を確立しているアルムデーナ・グランデスのデビュー作品『ルルの時代 *Las edades de Lulú*』(1989)は、官能小説に与えられる賞、「ソマリサ・ベルティカル賞」の受賞から始まっている。ここで描かれるのはセックスは知っているが愛は知らない少女ルルの性をめぐる放浪というべき内容で性描写に満ち、映画化もされている。

またミレーナ・ブスケツの『これもまた、過ぎゆく *También esto pasará*』(2014)は、ヒロインにとって圧倒的な存在でもあった母親の

死からなかなか立ち直ることができない40歳の女性ブランカが、傷心をなぐさめるために訪れたカダケスで、元夫や友人とのやりとり、それに愛人との密会などが盛り込まれた小説で、「わたしの知るかぎり、あとを引かず、一時的に死を—それに生も—吹き飛ばしてくれるのはセックスだけだ」と述懐する¹⁵⁾。物語にはそのように主体的にセックスをするヒロインが描かれる。ヒロイン、ブランカには2人の子どもがいるが、母親であることと一人の女性としてのセクシュアリティは両立するものだという小説を小説は示している。

4-4 規範を逸脱する少女に与えられる死

小説『バサジャウンの影』の猟奇的連続殺人の犯人は、長姉フローラの元夫ビクトルだった。犯人のビクトルには少女性愛という側面と、それとは相反するような、伝統的なモラルから最近の少女たちを許せないという感情があった。殺人の対象にしたのは親の言うことを聞かずにふらふらと遊び歩いて大人を誘惑するどうしようもないやつらだと彼が思った少女たちに、罰として死を与えていく。ゆがんだ価値観だが、エリソンドという北部スペインの小さな街で育った男性のある種の規範意識が事件につながっていった側面も示されている。

4-5 現代の女性と伝統的な家長の女性

作者のドロレス・レドンドは、同じ現代に生きている女性を描くなかで、一方は現代的なキャラクターとしてアマイアを登場させ、他方は北部スペインの伝統的な強さをもった女性フローラを登場させて女性像を対比させることで、スペインの女性の多様性を示している。

長姉フローラは父親が亡くなった後、長女として会社を引き継ぎ、事業家として軌道に乗せている。母親への態度をめぐってアマイアを非難しつつづけている。だが途中から連続殺人の犯

15) ミレーナ・ブスケツ『これもまた 過ぎゆく』井上知訳、早川書房、2016年、p. 11.

人が元夫であると気づき、最終的に猟銃を抱えて彼の住まいに乗り込み、ピクトルと対峙して引き金を引く。同時に家に忍び込んでいたアマイアが銃声を聞きつけて駆けつけたとき、なぜこんなことをしたのかと問うアマイアに答える。「だれかが止めなくてはならなかったのよ。あなたがそうするのを待っていたら、この渓谷は少女の死体で埋まってしまうから」。

フローラは、故郷の女性を表象するものとして造型されている。アマイアは、姉をこのように思う。

フローラはすべてを自分の規律にてらして牛耳ってきた。男たちが遠い国へ旅をして財をなそうとしていたあいだに、家と土地を守りぬいてきたこの渓谷の伝統的な女家長のひとりらしく、彼女は強さの鎧をまといっている。疫病で死んでいった子供たちを庭に埋めてから、眼に涙をためて畑仕事に出ていたエリソンドの女たち。生きていくことの汚れた暗い面を知り尽くし、日曜日には黙って顔を洗い、髪を整え、きれいに磨いた靴で教会のミサに通う、そんな生き方をしてきた女たちのひとりなのだ¹⁶⁾。

萩尾生は、北部スペイン、バスク地方の地形的な特徴から、いつの頃からか「山バスク」と「海バスク」という対比がなされるようになったと述べる。山バスクではバシェリと呼ばれる農家とその周辺の土地を守るために、不動産を分割せずに維持することが重要だとされ、一子相続制が社会規範として実践されてきた。家長はビスカイアでは長男が選ばれることが多かったが、ナファロアの一部では末子や長女が選ばれたり、あるいは最も才覚のある者が選ばれたとされる。要は遺産相続人が一人だということだった¹⁷⁾。『バサジャウンの影』に登場する長

姉フローラは、こうした伝統的な山バスクの女性家長「エチェコ・アンドレ etxeko andre (家の奥方)」の強い姿を造型するものだと言えるだろう。

いっぽう海バスクでは、少なくとも16世紀初頭にはバスク人が捕鯨を中心としてニューファンランド島沿岸まで遠洋漁業に携わっていたことが判明していたとされる。それを可能にしたのは大型船舶を建造するための高度な造船技術と、それに対応した操船技術の発達があったからだった¹⁸⁾。

作者のドロレス・レドンドは、父親が遠洋漁業に携わっていたため、「母系制社会」で育ったと『エル・バイス』紙のインタビューで答えている(2022年11月3日)。常に不在だった父親に代わり、地域の女性たちは食料品や羊毛を売って日々の生計を立てていた。しばらく後に遠洋漁業から帰ってきた父親は「ほら」と言って収入を母親に渡したが、経済的な面だけでなく、家のすべての管理をするのは母親だったと述べている。その意味でレドンドは、実質的な家長としてたくましく働く女性の日常を見て育ってきたのであり、それもまたバスクという地域の女性の特徴の一面を示していると言えるだろう。

5. 終わりに

『バサジャウンの影』では、事件が解決した後、アマイアに生理が来ないという描写で終わる。アマイアを苦しめてきた母親の呪詛からの解放が、肉体を変化させたのだろうということは読者に推察されるが、果たして母性の獲得が喜びなのか、違うのかというアマイアの心情に小説ではふれない。読者に委ねられている結末となっている。

生理が来る描写は、女性の身体と母性を表象

16) ドロレス・レドンド『バサジャウンの影』白川貴子訳、早川書房、2016年、p. 421。

17) 萩尾生・吉田浩美編著『バスクを知るための50章』

明石書店、2012年、pp.45~47。

18) 前掲、pp. 49~51。マヌエル・モンテロ『バスク地方の歴史』萩尾生訳、明石書店、2018年、pp. 96~97。

するものとして、物語に数回登場する。レンドンによれば、女性の生理について小説で言及されることは70年代にはなかっただろうとインタビューで述べている。

そのことから、現代の女性作家にとって、セクシュアリティを含む女性の身体への探求あるいはそれに基づく描写は、時代の変遷のなかで獲得してきた表現であると言えるだろう。今や当たり前のものとして自己の身体やセクシュアリティを語るヒロインが登場する。その意味で現代の窓は、さまざまな可能性を秘めて大きく開いているとも言える。しかしいっぽうではすでに見てきたように従来のジェンダー観もまた残存しており、それは「ガラスの天井」という言葉で象徴されるように、女性の社会活動を阻んでいる。女性作家による小説世界は、そのような現実を投影した表現として挑み続けるひとつの手段であると言えるだろう。

参考文献

- Busques, Milena, *También esto pasará*, Nueva York, Vintage Español, 2015.
- Cuesta Bustillo, Josefa (dir.), *Historia de las Mujeres en España Siglo XX*, tomo III, IV, Madrid, Instituto de la Mujer, 2003.
- El País*, 3 de noviembre de 2022.
- España en cifras 2019*, Instituto Nacional de Estadísticas, 2019.
- Frexas, Laura, *Madres e hijas*, Barcelona, Anagrama, 1996.
- *Literatura y mujeres: Escritoras, público y crítica en la España actual*, Barcelona, Destino, 2000.
- Fuentes del Río, Mónica, “La creación literaria en la obra de Carmen Martín Gaité. Una perspectiva de género”, Saneleuterio, Elia, Fuentes del Río (eds.), Monica, *Feminismo singular. Rivisiones del canon literario iberoamericano contemporáneo*, Salamanca, Talis, 2021, pp. 177~192.
- Guld Levine, Linda, Engelson Marson, Ellein, Felman Waldman, Gloria, *Spanish Women Writers: A Biographical Source Book*, London, Greenwood Press, 1993.
- M, Glenn, Kathleen, Mazquiarán de Rodríguez, Mercedes, *Spanish Women Writers and the Essay: Gender, Politics, and the Self*, Colombia, University of Missouri Press, 1998.
- Pardo Bazan, Emilia, *La mujer española y otros artículos feministas*, Madrid, Editora Nacional, 1976, pp. 129-130.
- 磯山久美子『断髪する女たち 1920年代のスペイン社会とモダンガール』新宿書房, 2010年。
- 「エミリア・パルド・バサン 先駆的なフェミニストとしての作家」高橋博幸・加藤隆浩編『スペインの女性群像 その生の軌跡』行路社, 2003年, pp. 154~168。
- 「窓辺から スペイン文学における女性の視点」カルメン・マルティン・ガイテ, 『流通経済大学論集』, Vol.52, No.4, 2018, 3, pp. 1~7。
- 「窓辺から スペイン文学における女性の視点 第一章 窓ごしに眺めながら」カルメン・マルティン・ガイテ, 『流通経済大学論集』, Vol.53, No.4, 2019, 3, pp. 1~12。
- 「窓辺から スペイン文学における女性の視点 第二章 書き方を探して」カルメン・マルティン・ガイテ, 『流通経済大学論集』, Vol.54, No.4, 2020, 3, pp. 1~12。
- 「窓辺から スペイン文学における女性の視点 第三章 男性的なミューズ」カルメン・マルティン・ガイテ, 『流通経済大学論集』, Vol.55, No.4, 2021, 3, pp. 1~13。
- 「窓辺から スペイン文学における女性の視点 第四章 奇妙な娘」カルメン・マルティン・ガイテ, 『流通経済大学論集』, Vol.56, No.4, 2022, pp.1~14。
- 「第9章 女性像の変容」, 立石博高編著『概説 近代スペイン文化史 18世紀から現代まで』ミネルヴァ書房, 2015年。pp. 206~247。
- カルメン・ラホレット『何もない』木村裕美訳, 河出書房新社, 2018年。
- 西田谷洋『女性作家は捉え返す—女性たちの物語』ひつじ書房, 2020年。
- フェルナン・カバリェーロ『かもめ』浅沼澄訳, 西和リブロス, 1990年。
- 三浦まり・後藤幹子編著『ジェンダー・クオータ 世界の女性議員はなぜ増えたのか』明石書店, 2014年。